

私の戸山

昭和十四年卒（第二十一回） 吉田 燿 子

昭和九年四月某日、戸山尋常小学校、二年四組に、京都から瘦せた小さな女の子が転校して来た。授業が始まる前の教室では、歯切れのよい東京弁が飛びかっていたが、だれもその女の子に話しかけなかった。これは東京人特有の気の使いかたなのだが、稚ない女の子には、わかる筈もなく、ただただ心細く緊張して、先生の入室を待っていた。第二課「なわとび」で国語の授業が始まった。担任は原ミツ先生。朗読の順番は容赦なく近づく。女の子は、すでにアクセントの違いに気がついていった。全神経を耳にあつめて東京のアクセントを真似しようとしたが……。

「そう、よく読めました。けれど『なは』ではなく『なは』。京都とアクセントが違いますから、これから少しづつ直してゆきましよう。でも大きい声で、はっきり読めましたね」。付焼刃はもろくも失敗におわったが、女の子にとっては、先生に云われた「よく読めました」が、こよなく嬉しかった。瘦せた小さな女の子は、登校拒否

もせずに、それから五年間「戸山」の生徒となるのである。幸運にも担任は変らず原先生であった。

学校生活に少し慣れてくると、女の子は教室の外を観察するようになる。上級の男子組の中里先生は、チョビ髭で肥っている。朝礼の時に号令台から大音声で「キオツケエー」と怒鳴る。或る時には、級長でも優等生でも、水の入ったバケツを頭上に持って廊下に立たせたり、階段の途中（！）に座らせたりなさる。だが罰をうけている男の子は、なんとなくニコニコしているように見える。小使さん（用務員）の豊島さんは、偉大な人物である。寒い季節の廊下に立たされて、シクシク泣いている生徒を見ると、廊下の掃除をしながら、かたっぱしから先生にあやまって、教室に入れてしまう。先生より偉く見えた。

女の子の三年上に姉がいる。姉の担任は安田孝平先生。先生は坐禅がお好きである。或る日「黙想！」と例の通り生徒に命じて、教室を出て行かれた。仲々戻られないので、「御不浄」に行きたくなつた生徒達は、こっそり抜け出した。われもわれもと大勢になった。ひとつだけ扉が開かない。ノックをしたら中から安田先生のお声で「おう」と返事があつた。連中がどつと教室にひきかえしたのは、いうまでもない。間もなく戻られた先生は何事もなかったかのように、両手をおなかのところに組ん

で、黙想を続けられた。この話をする時、姉はなつかし
そうにする。

女の子の背丈が少しのびた。母親に何か云っている。

「原先生は、国語のこと、安田先生におきよになる事があるの。その安田先生の上に芦田恵之助というえらい先生がいられるの。芦田先生は偉いのね」。母親は相槌を打たない。そして「原先生は本当に良い先生」とだけ云った。原先生は、体育ダンスが上手である。手の指の先から足の爪先まで、こゝろをこめて踊られる。女の子はうっとり眺める。某月某日、体操の時間に見知らぬほっそりとした女の先生が来られた。原先生は師弟の礼をとっていられる。三浦ヒロ先生だった。母親が洩らした「原先生は良い先生」の言葉の意味が、その時、この女の子にはっきり理解できた。謙遜で、常に向上すること
を心がけていられた先生に育まれて、この瘦せた女の子は、昭和十四年三月、六年四組から巣立って行った。

瘦せた女の子は、瘦せたオン年五十六才の普通のおばさんになって、これを書いてる。あれから幾星霜。小峰（安立）さんから寄稿の御依頼を受けてからの教日は、ただぼんやりと思いい出にふけるばかりであった。三角山の洞穴、戸山ヶ原、新大久保駅のガードの下で尺八をふいていた男の人、山の手線の線路の土手、踏切番の

小父さん、怪人赤マントの恐怖、模擬試験の葉半紙。あれから、長い戦争が敗戦に終って、気がついたら、あたら花の青春は、湘南のサナトリウムのベッドの上でさつさと過ぎてしまっていた。病後数年間の悪戦苦闘は今となればむしろなつかしい。絶えざる励ましの言葉で、再起を祈ってくださった、原先生もすでに八十才を超えられ、今尚孜孜と社会の為に働いておられる。「原先生は良い先生」と教えてくれた母は九十八才で、やはり元気に英語を教えている。瘦せたおばさんは、努力の甲斐あって、現在、津田塾大学図書館の司書の仕事にありついている。そして同窓会では「とやまがはらの、あさかぜにイー」と声をはりあげてうたおうと楽しみにしている。